

地域史学習に関する博学連携の可能性について

The Possibility of Establishing a New Regional History Studies as a Museum-School Collaboration

北林健二^{*2}, 斉藤理^{*1}

Kenji KITABAYASHI, Tadashi SAITO

Abstract :

In a closed regional area , there are many facilities of a research , possession and exhibition work for cultural asset , which has rich "resource of the intellect" . When using these resources aggressively, the multilateral educational effect would be brought.

But it isn't used so much actually. Isn't there this thing because of the case that the clear method isn't indicated. So the author of this paper proposed new regional history learning model by a master thesis. The model is without giving a burden to a teacher, but can "delivery" resource of the intellect to high school students. I would like to deepen more this studies, and to propose the new dimensional system by which students "goes to use".

When practice of a museum-school collaboration preceding study was seen, I couldn't look for the study which aimed at the system by which students "goes to use".In a background of this problem , or there is a possibility which is to "delivery" resource of the intellect to passive students. So I contrived the method to induce the interest taking the workshop as an opportunity. That's the workshop where "students make regional history learning materials".

Up to now , the author of this paper has the study which made college students and high school students group make regional history learning materials. They could wrestle with the high morale and I confirmed the fixed outcome. But, a problem was left for "independence" and "the initiative". While it was work, a distribution "the initiative" was shown, but it wasn't possible to make them continue after work. So I planned the workshop focus-ized in the students can keep to the ability of "the initiative" even after the class.

As a result, this workshop gave opportunity to student's voluntary behavior promotion. The auther will try to find a solved beginning to the problem that it couldn't be settled by the way of the museum-school collaboration untill today.

キーワード：地域史学習, 高等学校日本史, 博学連携, ワークショップ, 学習プリント

Key words : Regional History Studies, Japanese History of High School, Museum-School Collaboration, Workshop, Learning Print

*1 山口県立大学大学院国際文化学研究科准教授 Assoc.Prof., Graduate School of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

*2 山口県総合企画部スポーツ・文化局県史編さん室明治維新部会専門研究員, 修士 (国際文化学) MA, Intercultural Studies, Research Specialist in Yamaguchi Regional History Compilation Secretariat

1. 本研究の背景、目的

1-1 問題の所在

右に示したものは、筆者の勤務先¹⁾に架蔵されている「高杉晋作を奇兵隊の総管に任じた辞令」の写真である(図A)。1行目に記された「亥六月廿七日」の文字は文久3(1863)年6月27日を示している。下関海峡における長州藩の攘夷決行が同年5月10日、これに対する米仏軍艦による報復攻撃が6月1日と5日、萩藩主毛利敬親が県央部に仮の政事堂を設けるのが6月18日という時代背景と重ね合わせると、歴史の激動期を示す象徴的な古文書の1つであると言える。

地域の博物館・史資料館などを始めとする所蔵・研究・展示施設(以下「博物館等」)には、こうした地域史に関する〈知の資源〉が豊富に蓄積されている。そして、たとえばこの「辞令」を日本史の学習プリントの一隅に転載して幕末維新期の授業を展開したならば、多様な視点から歴史を読み解く主題学習が可能となるであろう²⁾。また、2013年度から年次進行で実施されている「高等学校学習指導要領」における日本史Bの「内容の取扱い(1)」は以下のように記されており、学習者と地域の〈知の資源〉とを結びつけた歴史学習を実施することが制度としても求められていることがわかる。

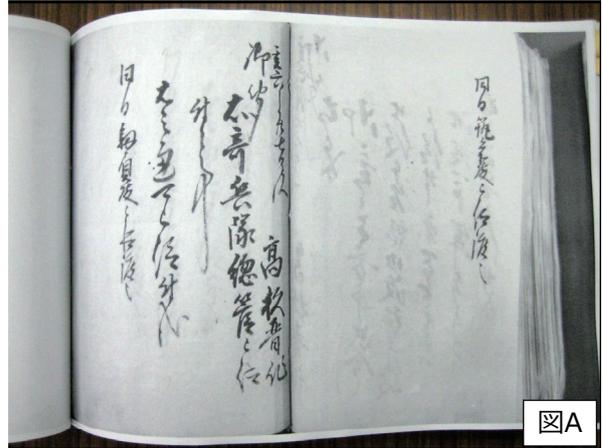
3 内容の取扱い(傍線筆者)

(1) 内容の全体にわたって、次の事項に配慮するものとする。

ウ 年表・地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるように工夫すること。

しかしながら現在、教育の現場においてこうした〈知の資源〉が十分に活用されているとは言い難い。地域史学習が高等学校の歴史教育に定着していないことは、その証左であろう³⁾。また博物館等の側からも、近年、博学連携の概念が履き違えられているとの指摘がある。すなわち、総合的学習の時間が博物館側の教育プログラムへの丸投げとなったり、目的意識を持たない放任的な自由見学となっているなど、その閉塞感に対して強い危機感が抱かれている⁴⁾ことも、この問題を裏付けている。

これらの要因が地域素材と学校とをつなぐ明確なメソッドの欠如にあることを、筆者は先に拙稿「高等学



校における地域素材を活用した新しい日本史授業モデルに関する研究⁵⁾」で明らかにした。そこでは、地域史学習プリントの扱いやすさを生かしつつ、その学習効果を高めることを通して、実現可能性の高い地域史授業モデルを提案することができた。

なお、この授業モデルは次の3つの課題を残した。

- 1) 授業者が地域史素材を教材化する際に、その負荷を最小限に減じること
- 2) 授業者が膨大な情報群から地域素材を選択する際に恣意的な偏在が起らないこと
- 3) 学習者に与えられる史資料の情報を第三者の編集などによって劣化させないこと

上記1)～3)の課題は、地域素材に関する情報が授業者が編集し、咀嚼して学習者のもとへ届けていることが背景にあると考えられる(図B)。したがってこれらの課題を解決し、地域史に関する〈知の資源〉をより効果的に活用するためには、学習者自身に編集させる必要がある。すなわち、学習者の関心を惹起することを通して、内的動機に導かれて自ら一次史料にアプローチするしくみを作る必要があると認識している。



1-2 研究の目的

地域史学習に関する博学連携の先行研究をひも解くと、学習効果の高さについて論じたものと、実践事例を報告して教育効果を分析したものに集約することができる。

さらに後者の実践事例は、高橋（1998）⁶⁾の知見に基づいて、学習の場を地域の史跡を含む博物館等と学校の2つに大別した上で、実践された時間帯に着目すると、以下のように類型化できる。なお、高等学校や大学における実践報告は事例数が少ないため、小中学校における実践でも他校種で援用できそうな事例は含めることとした。

1-2-1 地域の史跡を含む博物館等における実践

①	平日の授業時間帯：主題学習として実践 ^{*7)}
②	平日の放課後：郷土史研究部などの活動 ^{*8)}
③	休日：長期休業中に与えられた課題を作成 ^{*9)}
④	休日：博物館等の体験的な企画に応募 ^{*10)}

1-2-2 学校における実践

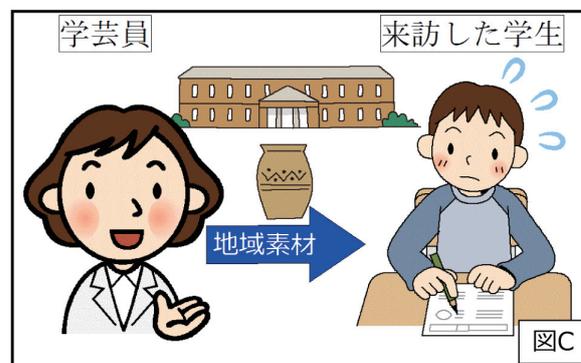
⑤	平日の授業時間帯：博物館等による出張授業 ^{*11)}
⑥	平日の授業時間帯：博物館等の協働プロジェクトに学校が対応 ^{*12)}
⑦	平日の授業時間帯：博物館等の貸出史資料を利用 ^{*13)}

これらの実践事例を総括すると、以下3点の条件を同時に満たすことの難しさを指摘せざるを得ない。

- | |
|--|
| 4) 教室内において簡便に実践できること
5) 個々の関心に応じた情報が提供されること
6) 学習者の主体性に立脚させること |
|--|

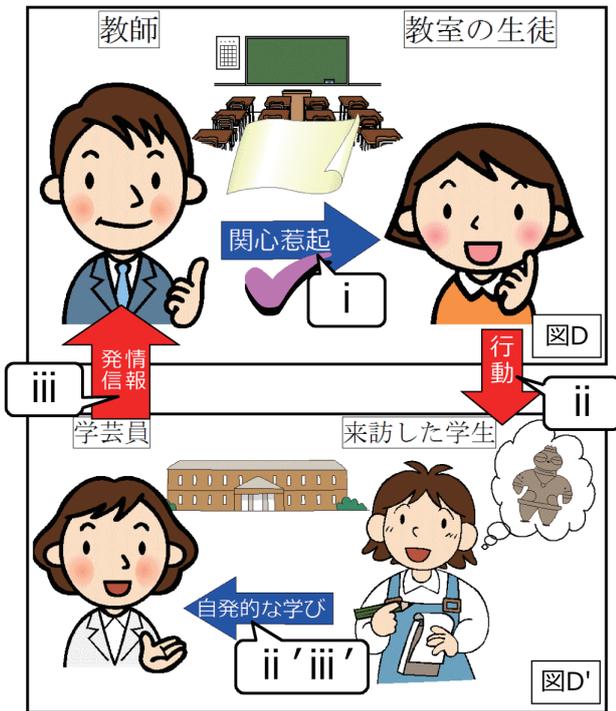
たとえば①の通常の授業時間帯に教室外で実践する事例はレア・ケースにとどまっており、博学連携の取組を教室内で簡便に実施することの難しさを浮き彫りにしている。一方、⑤⑥⑦のような教室における実践は簡便である反面、個々の関心に応じた情報が提供されにくい課題点を持つ。また、④は個人の自発性に立脚したもので多くの実践事例を見ることができる。しかしながら⑤⑥⑦と同様に、博物館等の側が編成した教育プログラムへの依存度が高いため、学習者の主体的な一次史料へのアプローチという側面においては不完全なものとなりがちである。さらに、②は学習機会を享受できる者の絶対数が少ないこと、③は知的好奇心よりも課題の解決が優先されがちであるなどの問題を残している。

上記のような理由から、既存の実践事例は先述の4)～6)の諸条件を満たすことが難しいと考えられる。そしてその背景には、博物館等の職員が地域素材に関する情報を選択的に学習者のもとへ届ける学習スタイルがあるようだ。換言すれば、多くの学習者に効率的・体験的な学習機会を提供するため、周到に準備された博学連携プログラムであるだけに、きわめて高い学習効果をもたらす一方、学習者の主体性・自発性に十分に繋ぐことができずにいるのである。このことは、地域素材に関する情報を他者が編集し、選択的に学習者のもとへ届けていることに起因する問題（図C）として捉えられる。すなわち1-1で述べた筆者の授業モデルにおける問題と同列のものとして論じることができる。



したがって上記の課題を解決し、より実効性の高い博学連携を推進するためには、教育の専門家と文化財の専門家がそれぞれの立場を生かして有機的に協働することに主眼が置かれるべきである。すなわち、次頁のi)～iii)の3つのステップに立脚した善循環を理想モデルとして描くことができる（図D-D'）。そのためにはまず、学習者の関心を惹起することに焦点化した地域史学習手法の開発が有効であると考えられる。

そこで本稿では、学生が学習プリントを作成する地域史学習モデルを、筆者のこれまでの実践の蓄積の上に試行したい。その上で、学習プリントの作成を契機として関心を惹起し、学習者を地域の博物館等へ向かわせることができないうか、その可能性を探りたいと考えている。



- i) 教師： 学校において、学習者の関心を惹起できる地域史学習を展開する
- ii) 学生： 目的意識を持って地域の博物館等を訪れる
- iii) 学芸員： 個々の関心に応じた情報提供と、所蔵する〈知の資源〉に関する情報を発信する

1-3 研究方法

筆者が2011年から2013年にかけて実践した、学生が学習プリントを作成する地域史学習モデルを総括すると、概ね次のようにまとめることができる。

評価の指標	a	b	c	d	e	f	g
	時間的負荷の少なさ	空間的負荷の少なさ	作り手の持つ予備知識	プリントの情報量	利用した高校生の評価	作り手の主体的な編集	作り手の自発性の促進
長登銅山 ^{*14)} (大学生)	×	×	○	×	△	△	×
巖島神社 ^{*15)} (高校生①)	○	◎	△	◎	◎	△	○
蒙古襲来 ^{*16)} (高校生②)	◎	◎	◎	◎	◎	△	△

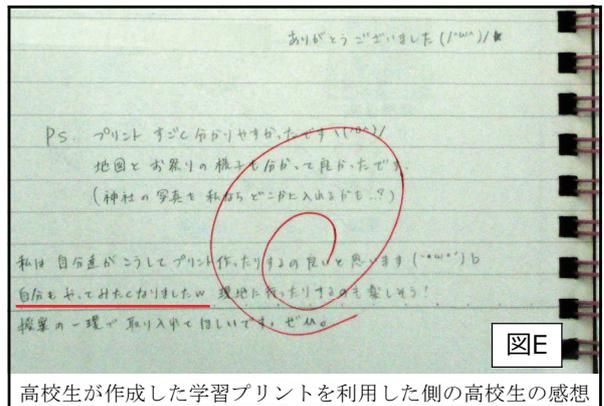
1-3-1 これまでに実践した学習モデルの有益性

上記の学習モデルの有益性は、次の2点に集約することができる。

- ① 作成プロセスの汎用性の高さ
- ② 学習プリントとしての水準の高さ

① (汎用性)は表中 a (時間) b (空間) c (予備知識) の3つの評価の指標から導いたもので、限られた時間と空間の中で作成することができるのみならず、作り手の持つ学習準備性 (readiness) に左右されることがないことを示している。たとえば〈蒙古襲来〉の事例は、世界史選択者を含む高校生2人が学校内の一室において3時間で学習プリントを作成することができた。その際、受験に直結しない企画であっても意欲的に向き合っており、打算的な動機からではなく、作り手の知的好奇心を背景として実践できる学習モデルとしての可能性を示した。

また② (水準)は d (情報量) e (高校生の評価) の2つの評価の指標から導いたもので、豊かな情報量を持つ学習プリントとして作成されているのみならず、利用した高校生からの評価が高いことを示している。たとえば〈蒙古襲来〉の成果物は地図や写真、文献から引用したエピソード等を満載しており、高校生からも好評であった。そこでは「自分もやってみたくなりました」といった反応までも得られている(図E)。



1-3-2 これまでに実践した学習モデルの課題

一方、表中 f, g の2つの指標においては、改善の余地を残した。たとえば f (主体性) においては、高校生に受容されやすい言語世界で記述するなどの工夫がみられる一方、記事は書籍やWEB上の情報を無批判に転記する側面が散見された。また g (自発性) は、学習プリントの作成後に、作り手が自発的に地域の博物館等を訪れるような具体的行動への結びつきを確認することができなかった。

一方、作り手の自発性は編集作業場面においては発揮されている。たとえば〈巖島神社〉の事例では帰宅後に広島巖島神社について文献を調べ、以前に自分が撮影した写真を探し出したり、週末に保護者と一緒に県内各地の巖島神社を訪れて情報を収集した高校生があった。

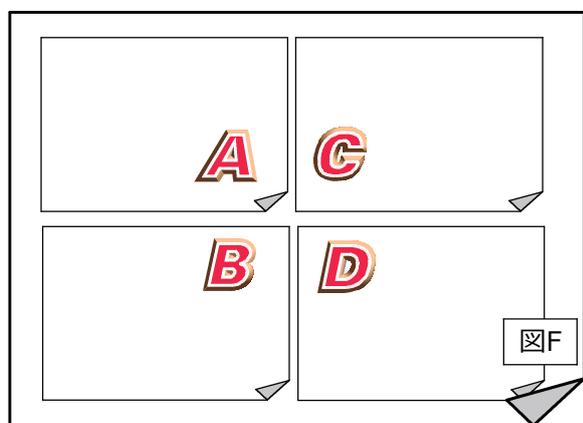
したがって本研究では、上記 **f** (主体性) と **g** (自発性) の2点を促すことに焦点化した学習プリントの作成手法を試行することとした。とりわけ **g** (自発性) の側面に関しては、編集作業場面において発揮された関心を作成後も持続させる糸口が見つければ、学習者を地域の博物館等へ向かわせる契機を提供できる地域史学習モデルとなる可能性を持っている。

1-3-3 新たな改善モデルの構想

前述のように、本研究における地域史学習の改善モデルが主眼としたのは以下の2点である。

- ① 主体性の涵養
- ② 自発性の促進

そのために施した改善点は、「プリントをA～Dの4象限に分割」する手法の採用である。なお、学校現場における利活用の便宜を考え、1つの主題を1枚で完結させるスタイルは従来通りとした(図F)。



このモデルは、B象限で作り手の主体性を意図的に引き出す工夫を施した。具体的には、「そう言えば」をキーワードに、〈around me〉の情報を出発点として記事を叙述させることとした。また、D象限では自発的関心を持続させることを企図した。ここでも「そう言えば」をキーワードに、発信したい情報をリストアップさせることとした。したがって、本研究において学生が学習プリントを作成する新たな地域史学習の改善モデルを、以下便宜上、「そう言えばメソッド」と呼ぶこととする。

A：視覚効果の高い地域の素材を選定する

→啓蒙的にしない

B：主体性を持つ情報を掲載する

→他者の手による編集情報に流されない

C：社会性の高い情報を掲載する

→学習プリントとしての水準を確保する

D：行動に結びつく情報を掲載する

→入手して発信したい情報を想定させ、自発的関心を持続させる

2. 「そう言えばメソッド」による地域学習の実践

2-1 自主ゼミの実践

1-3-3で述べた改善モデル「そう言えばメソッド」を試行するワークショップは、山口県立大学の協力を得て、事前申し込み制による自主ゼミ形式で実践した。しかしながら、限られた時間内での実践であるため、フィールドワークや図書館・博物館等を利用して情報を収集する時間は設定できなかった。そこで、こうした環境を肯定的に捉え、閉ざされた教室内で「外部情報を遮断する」ことによって情報に飢えさせることを通して主体性を引き出し、かつワークショップ終了後も関心を持続させるトレーニングとして位置づけることとした。

日時：2014年2月15日(土)
午後12時50分～午後4時00分
会場：山口県立大学D24教室(Y-ACT室)
参加者：国際文化学部文化創造学科2年生7名

2-1-1 A象限：視覚効果の高い地域素材を選定する

A象限には〈日常的な地域の風景〉を掲載することとした(図G)。この象限の作成にあたって留意したのは、以下の3点である。



(例) 現在も生活道路として使われる旧街道 (Google Street View 利用)

① 視覚効果の高い素材を用いる

啓蒙的なワークショップとしないための工夫である。興味のない者を無理に振り向かせるのではなく、生活圏にある風景を手にしたゼミ参加者を「何だろう」と感じさせ、自主的に編集作業に向き合わせるスタートラインに立たせるための仕掛けとして意識した。

② 学生の生活圏にある身近な素材を用いる

生活する地域への意識を刺激するための工夫である。このワークショップで編集して魅力的に紹介できた素材が身近なものであればあるほど、この手法の汎用性に思いを至らせることができると考えた。

③ ありふれた日常的な素材を用いる

独自性を引き出すための工夫である。日常的な素材は、これまでに編集されたことのない新鮮な素材であるため、先入観を持たずに編集作業に取り組むことができる。また、添えられる情報についての正解を持たない。さらに、編集のしかたによって魅力的に紹介できた場合、その落差を実感しやすいと考えた。

なお、グーグル・ストリートビュー（Google Street View）の画像を用いたのは、以下3点の理由による。

- ・ 素材を机上で入手できるため、準備の負担が軽減されること
- ・ ワークショップ終了後に、参加者が関心に応じて仮想のフィールドワークができること
- ・ 海外で地域の魅力を発信する際に、WEB環境さえ整えば入手しやすい視覚素材であること

筆者の期待したモデル

筆者の設定した〈日常的な地域の風景〉は22枚で、地域の神社や地蔵尊、旧街道の町並みなど地域史に結びつけやすい素材も取り混ぜた。なお、それぞれにB象限で記述できる連想やC象限で記述できる社会化の事例を想定し、編集作業が進捗しないグループが出た場合にヒントを提供できるよう準備した。

参加者による成果

参加者3グループの選定した〈日常的な地域の風景〉は、以下の3点である。

- ① 「小学生の下校」(図G)
- ② 「布団干し」(図H)
- ③ 「自動販売機と鯉のぼり」(図I)

学習プリントに仕立てやすい歴史的素材ではなく、参加者がこれら典型的な日常風景を選択したのは予想外であった。これは、ワークショップの導入部分で「編

集」によって身近な素材を魅力的に発信できることをレクチャーしたことの影響が大きいと考えられる。



2-1-2 B象限：独自性の高い情報を掲載する

B象限には、A象限の地域素材から〈連想できる情報〉を掲載することとした。この象限の作成にあたって留意したのは、以下の3点である。

① 説明的な情報は与えない

WEB上で容易に入手できるような一義的な記事を記述させない工夫である。通常の学習プリントであれば、この部分は他者の手による説明情報を機械的に転記したものが「正解」として入るであろう。しかしながらこのワークショップでは、あえて外部情報が遮断された環境下にあることを利用し、参加者自身の持つ情報を資源とさせることとした。

② 〈強制連結法 (compulsory linkage)¹⁷⁾〉を援用して連想を広げる

自分を出発点とする〈連想〉をさせながら、A象限の地域素材をリフレーミングさせる工夫である。参加者が自らの生活体験などを想起しながら、自由に解釈を広げることを通して、素材を発展的に記述する情報を集めることとした。

具体的には、以下のような「日本的なもの」に関する(主題)をスクリーンに投影し、奇抜な連想で連結できるよう支援しながら進化した。

- ・ 潔癖性 (時間の正確さ、整った町並みなど)
- ・ 色の概念 (青の多義性、赤い太陽など)
- ・ 食生活 (米食、海の幸、お弁当、食器使いなど)
- ・ 精神生活 (土着信仰、精霊崇拜、自然との共存など)
- ・ 育児 (添い寝、家族で入浴、カギっ子など)
- ・ 住居 (一室多用、浴槽の使い方、建築素材など)
- ・ モノ作り (収納性と運搬性、性別のある食器など)
- ・ 社会生活 (もったいない意識、空気を読むなど)
- ・ カワイイ文化 (ポップカルチャー、クールジャパンなど)

③ 会話文で記事を記述する

参加者に記事を書かせやすくするための工夫であ

る。これは筆者が高等学校の定期考査問題を作成する際に用いてきた手法であり、散在する情報に関連性を持たせつつ、無理なく記述できる利点を持つ。また同時に、情報の受け手も読むときの抵抗が少ないことがわかっている¹⁸⁾。

筆者の期待したモデル

2-1-1で述べたように、筆者はそれぞれの〈日常的な地域の風景〉に関してB象限で記述される連想を予見してヒントを準備していた。たとえば先に示した「現在も生活道路として使われる旧街道」の場合は、道の持つ記憶、安心感などを手がかりに、以下のような想定解を設定した(図J)。

B

(A)「**そう言えば**、この道って自動車が走っていないね。」
 (B)「まっすぐな道が遠くまで見えるのよね。」
 (A)「道幅が狭いからじゃないの?」
 (B)「そうか!ここはたしか、石州街道って言う旧街道だよ。」
 (A)「うん。江戸時代から残るメインストリートだよ。石州」だから、島根県まで続いているんじゃないかな。」
 (B)「当時のスケールがそのまま残ってるんだね。地域の人たちが守ってきたのかな。これもある意味、遺跡だよ。」
 (B)「そこを、子どもたちが登下校に使ってるんだね。」
 (A)「道幅が狭いから交通量が少なく、安心して歩けるよね。」
 (A)「うん。古い町並みが残る歴史の道を毎日歩けることの幸せに、この子たちは、いつ気づくのかな。」

[図J]

(例) 筆者の期待したB象限の想定解

参加者による成果

参加者が実際に作成したB象限の成果物(図K)を見ると、自由に発想を広げながら混乱なく記述していることがわかる。したがって、ヒントの提供を必要とする場面は見られなかった。なお、以下の事例は「小学生の下校」を地域素材として、選択した(主題)「もったいない意識」とを〈強制連結〉したものである。

B (A) 会話文カード
 「**そう言えば**、きき近所の小学生が下校しているのを見かけたよ。」

(B)「なつかしいなあ。小学校の頃、色んな楽しみがあったよね。」

(A)「運動会とか遠足も楽しかったけど、やっぱり一番楽しかったのは給食かな。」

(B)「わたしはいつも残さず食べて、お昼休みに中庭まで行っていたなあ。」

(A)「でも、いつも休んだ人とか食べ残さなかった人とかジャンクフードを食べたよね。」

(B)「そうだね。クラスの中で給食が残らないようにしてたよね。」

(A)「それで、今のもったいない気持ちや食で残っているのかもしれないわ。」

[図K]

(例) 参加者の作成したB象限の成果物

2-1-3 C象限：社会性の高い情報を掲載する

C象限には、B象限で選択した(主題)にメッセー

ジ性を持たせて〈社会化した情報〉を掲載することとした。この象限の作成にあたって留意したのは、以下の3点である。

① 「(主題)は地域や世界を変える」というテーマで記述させる

高校生の利用に供する学習プリントとしての性質を持たせるための工夫である。編集された情報にメッセージを含ませることができれば、学校現場では主題学習としての利用がしやすくなると考えた。また、そのメッセージは海外で地域を紹介するときにも発信しやすいものであることが望ましいと考え、「この写真が伝える国際社会へのメッセージは何だろう」というヒントを与えた上で編集作業に移行した。

② 論理的な理由を考えさせる

(主題)にメッセージ性を持たせる上で不可欠なプロセスである。しかしながら、情報が遮断された状況下で(主題)を複眼的に読み解く能力が求められる場面でもあり、困難を伴う編集作業となった。

③ A象限に掲載した地域素材に収斂させる

学習プリントとしての一貫性を持たせるための工夫である。C象限で記述したメッセージをA象限の視覚情報に連結することを通して、自らの住む地域を「魅力的に紹介」させたいと考えた。

筆者の期待したモデル

筆者が当初想定した社会化の解は、大人の姿が見えなくても子どもたちだけで下校できる日本の治安の良さや秩序正しさであった。なお、参加者の選択した(主題)「もったいない意識」をもとにした目標水準の記載例を示すと、概ね以下ようになる(図L)。

C

もったいない意識は、地域や世界を変える。

その理由は、「小さな事でもおろそかにしない」という発想が背景にあるからだ。この発想を出発点にすれば、たとえば私たちが暮らす地域では、誰もが暮らしやすいようにまちを点検し、ユニバーサルデザインを進めるなど、思いやりを持ったまちづくりが可能になるだろう。また、世界では限られた資源の有効活用を呼びかける精神的土壌を築くことができる。

写真にある「土塀」は、まさにもったいない意識のシンボルであろう。その白さは月明かりでも夜道を明るく照らし、またその素材は持続可能な資源活用を世界に発信できる説得力を持つ。

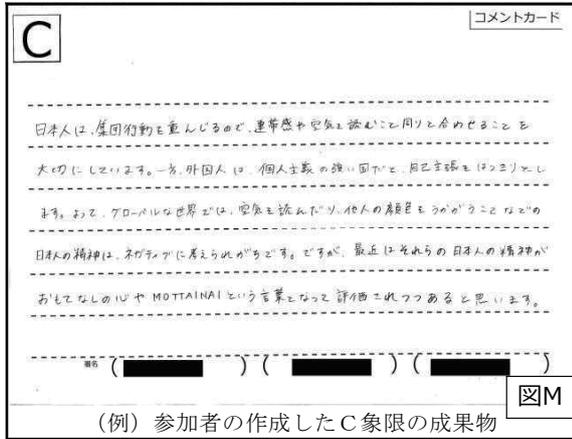
[図L]

(例) 筆者の期待したC象限の想定解

参加者による成果

参加者が実際に作成したC象限の成果物の事例を次に示す(図M)。この象限の記事を作成する場面では

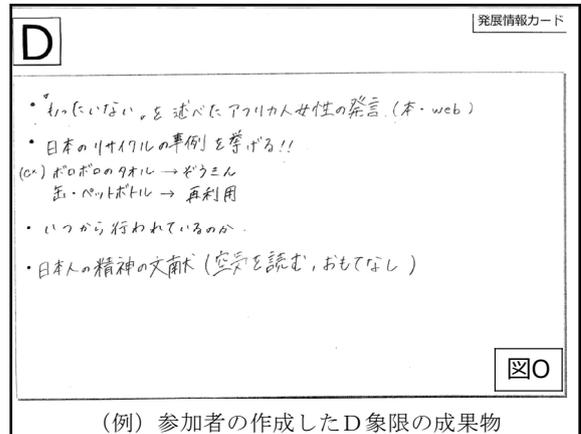
十分な時間的余裕がなく、参加者の集団思考を促すことができなかった。したがって、グループの特定メンバーの記述を選んで転載したものが中心となった。



(例) 参加者の作成したC象限の成果物

参加者による成果

参加者が実際に作成したD象限の成果物の事例を示す(図O)。なお、情報が遮断された環境下にあるため、固有名詞を用いた記載には至っていない。

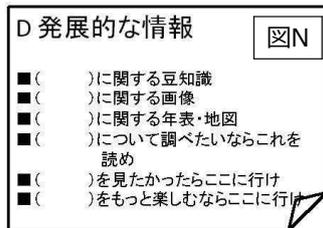


(例) 参加者の作成したD象限の成果物

2-1-4 D象限：行動に結びつく情報を掲載する

D象限には、学習プリントの多様な読み手に発展学習の機会を与えることを想定して、〈入手して発信したい情報〉を掲載することとした。ただし、情報が遮断された環境下にあるため、想起できる範囲内でリストアップさせることが限界である。しかしながら、この体験は素材や主題への関心を持続させ、ワークショップの終了後に〈知の資源〉に向かわせる強烈な欲求を参加者に与えるのではないかと考えた。

なお、この象限の作成にあたっては、ヒントをスクリーンに投影した上で編集作業に移行した(図N)。



筆者の期待したモデル

ここまで示してきたB・C象限の記載例によれば、筆者がD象限に設定する想定解は以下ようになる。

- (例) 筆者の期待したD象限の想定解
- ・石州街道に関する略年表・地図
 - ・石州街道の古地図と現在の地図との比較
 - ・小学生の制服導入率とその背景
 - ・『歴史の道調査報告書』『モットイナイで地球は緑になる』などのブックガイド
 - ・ユニバーサルデザインを進めるNPO等の紹介
 - ・世界の資源とエネルギー問題を集約したデータ

なお、このワークショップは留学を間近に控えた学生を対象に実施したため、素材の編集技法の汎用性を高めることができるよう意識して進化した。すなわち、上述A～D象限を集約して1枚の学習プリントとする「そう言えばメソッド」の一連の流れを体験した後に、次のステップとして、各自が持ち寄った「思わず足を止める風景」「日常の食卓」などの身近な写真素材を用いて学習プリントを作成するワークショップを実践した(図P)。



各自が持ち寄った写真を素材に記事をまとめる

2-2 実践上の気付き

2-2-1 獲得できた成果

ワークショップの最後に行ったシェアリング(図Q)及び自由記述法によるアンケートによると、参画した学生に促すことのできた成果は以下の3つに集約することができる。



図Q シェアリング風景

① 地域を見つめる意識の変革

「何もない」と考えがちな生活圏の素材に対して、新たな価値を見いだそうとする意識を醸成することができた。以下のコメントは、このことを端的に示している。

- ・つい見過ごしてしまいがちな風景にきちんと注目していくことの大切さが実感できた。(シェアリングより)
- ・“普段、何とも思っていない風景”が、感覚的にも見方が変わるワークショップで、今回得た学びは大きいと思いました。(アンケートより)

② 素材の多義性に関する気付き

地域素材の解釈は、WEBなどから容易に入手できる一義的な正解のみならず、多義的な解釈が可能であることへの気付きを促すことができた。このことは同時に、歴史の記述は教科書に記載されたもののみならず、無数の記述があることの可能性について思いを至らせることにつながったと考えている。すなわち、歴史の叙述を中央史の普遍性に終始させず、地域史の個別性に立脚させる歴史観の獲得に手がかりを与えることができたと言言できる。以下のコメントは、このことを端的に示している。

- ・「自分の感覚的な情報は正しい」という話が印象的だった。感覚的なことを伝えてもいいんだ、ということ再認識できたことは、大きな収穫だった。自分はあまり知識がないので、何だか励まされた感じも受けている。

- ・一見異質なもののどうしを繋ぐという手法は、とても興味深い新たな発想法になるのではないかと感じた。
- ・原点に立ち返って「発信するとは何だろう」ということについて、初歩から真剣に考えることができた。
- ・自分の中にある潜在的な意識や記憶に思いを至らせることができた。(以上シェアリングより)
- ・自分が見たときにもった最初の印象で、ストーリーを作ることができることに気づきました。(アンケートより)

③ 〈知の資源〉への自発的なアプローチへの動機づけ

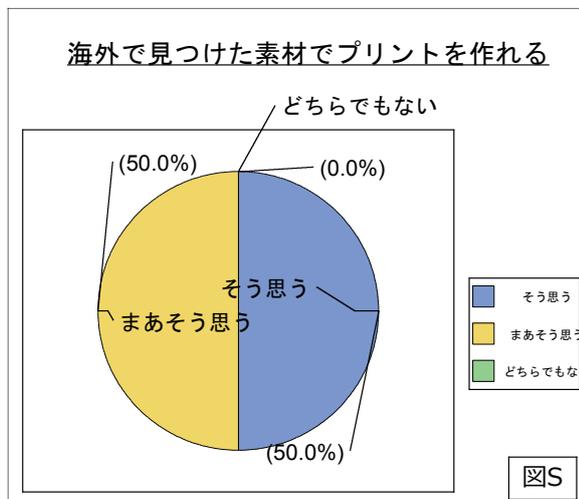
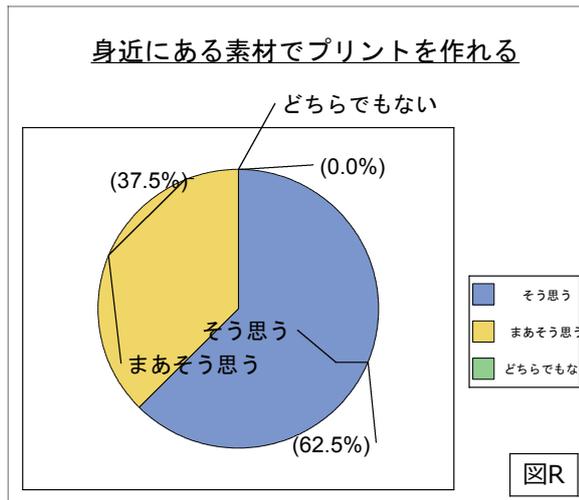
ワークショップ終了後も学生の関心を持続させ、〈知の資源〉への自発的なアプローチへの契機を与えることができた。これは1-2で述べたように、今回の試行実践が最大の目標としていたものである。以下のコメントは、このことを端的に示している。

- ・自分が研究しているテーマと重なる部分大きい。留学時に生かしたいと思う。
- ・今日学んだことは、日本国内のみならず、海外でも生かせる用途の広い手法だと思う。
- ・留学から帰った来たら、多くの人にこの手法を試してみたい。
- ・外国で見つけた素材を日本に発信するということができるようになりたい。
- ・(伝える)ためには言葉の問題は外せないの、語学力も高めていく必要を感じた。
- ・読んだ人を「こんなところに行ってみよう」と感じさせるような情報発信をしていきたいと思う。(以上シェアリングより)
- ・もう少し自分に知識があれば、もっとアイデアをふくらませたのにな、と思い、少し反省しています。(アンケートより)

調べ学習の段階で他者の編集した情報を無批判に受け入れ、それによって全体像を把握した錯覚に陥り、表層的な達成感を得ることは容易である¹⁹⁾。しかしながら、このワークショップは情報が遮断された環境下における実践であったため、入手できる情報量に強い飢餓感を感じ、それ故に関心を持続させる効果を出すことができたと推測される。

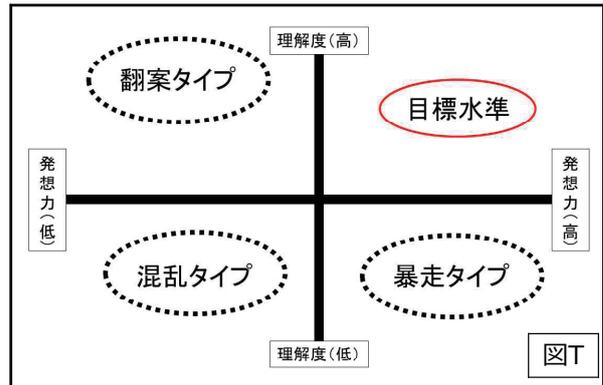
なお、スケール法を用いたアンケート結果によると、身近にある素材でプリントを作れると「思う」と回答した参加者は62.5%で、残り37.5%は「まあ思う」

と回答した（図R）。また、海外で見つけた素材でプリントを作れると「思う」と回答した参加者は50.0%で、残り50.0%は「まあ思う」と回答している（図S）。母集団が少ないため、この結果だけを以て傾向を論じることにはできないが、少なくとも今回の改善モデル「そう言えばメソッド」が参加者の自発性を促す契機を与えた可能性を指摘することができる。



2-2-2 残された課題

上述のように、「そう言えばメソッド」は作り手の自発性の促進という側面においては、一定の成果を取ることができた。一方、その成果物の完成度は、主体的な編集という視点で記事を評価すると、いずれも筆者の想定した目標水準には到達していない。編集作業に困難を伴ったC象限を対象としてそれぞれの持つ問題点を整理すると、右の3類型に分けることができる（図T）。



a 翻案タイプ

記憶を探って借り物の「観念論」を持ち出し、期待されるであろう一義的な正解を記述しようとするもの。

b 暴走タイプ

論理的な「理由」を考えるのではなく、根拠のない「予想」を立て、それを前提に論じるもの。

c 混乱タイプ

スペースを埋めることを優先して混乱したまま書き始め、收拾がつかなくなるもの。

このように、B象限において独自の発想を広げることにはできても、その着想にメッセージ性を持たせて社会化されたものとして収斂させていく主体的な編集能力の涵養においては、「そう言えばメソッド」は改善の余地を残すこととなった。

3. まとめと提言

3-1 「そう言えばメソッド」の有益性

3-1-1 自発性を促進すること

本稿では1で、地域にある豊かな〈知の資源〉が十分に活用されておらず、その要因が地域素材と学校とをつなぐ明確なメソッドの欠如にあることを指摘した。さらに、この問題を解決するためには学習者の自発性に立脚した有機的な博学連携モデルの開発が急務であることを述べた。

また2では「そう言えばメソッド」の試行実践を通し、この手法が学習者の関心を持続させ、自発的に〈知の資源〉へ向かわせる可能性を持つことを明らかにした。

すなわち、「そう言えばメソッド」は1-1及び1-2で指摘した以下6点の課題解決に有効であると言える。

- 1) 授業者が地域史素材を教材化する際に、その負荷を最小限に減じること
- 2) 授業者が膨大な情報群から地域素材を選択する際に恣意的な偏在が起らないこと
- 3) 学習者に与えられる史資料の情報を第三者の編集などによって劣化させないこと

- 4) 教室内において簡便に実践できること
- 5) 個々の関心に応じた情報が提供されること
- 6) 学習者の主体性に立脚させること

以上のことから本研究は、従来の博学連携の手法では解決できなかった〈知の資源〉を効果的に活用するための一手法を明確に示すことができたと考えている。

3-1-2 副次的効果が大きいこと

なお、「そう言えばメソッド」の手法によって作成された地域史学習プリントが学校現場で広く活用されるようになれば、以下に示すような副次的効果を期待することができる。

① 教師

地域史素材を入手し、教材化し、授業へ導入する際の負荷が少ないため、地域史学習の頻度を高めることができる。また、多種多様な学習プリントを容易に入手できるため、生徒の実態に応じた地域史学習の柔軟な実践が可能になる。

② 高校生

身近な素材を扱っており、また年齢の近い作り手によって編集された学習プリントであるため、既存の教材と比較して授業への興味関心が高まる。さらに大学生の手による成果物に直接接触れることを通して、大学における学びへの円滑な接続に資する。

③ 大学生

一次的な素材を自発的に収集して編集する技法が習得できるため、レポート作成時等の学びの質が変わる。

④ 地域社会

地域へのヒアリングなどを通して、団塊の世代を資源にすることができる。また若い世代が地域への関心を持続的に深めることを通して、伝統的なものを保持することに対する地域の誇りを醸成する。

⑤ 博物館等

複眼的な視点から文化財の価値を再認識する機会が増え、地域史研究に深みと広がりをもたらす。

3-2 今後の課題

上述のように本研究においては、「そう言えばメソッド」の手法が多面的な有益性をもたらすことを確認することができた。なお、2-2-2で述べたように、主体的な編集能力の涵養においては、以下 a～c の問題点があることも認識した。

a 翻案タイプ

b 暴走タイプ

c 混乱タイプ

これらの問題点については、筆者は今後、次のような改善策を実施したいと考えている。

a 翻案タイプ

適切なキーワードを与えることによって、多義的な解釈が間違にできるようにリフレーミングを促す。

b 暴走タイプ

具体的に記事のフォーマットを与え、文脈の構成を明確にすることによって、発想の収斂を促す。

c 混乱タイプ

付箋を活用した思考の視覚化などのトレーニングを導入することによって、集団思考を促す。

なお、2014年6月25日に山口国際文化学会においてこの手法を発表した折には、来場者から次のような解決のヒントが寄せられた。これらの示唆に富む知見は、今後の継続研究に生かしたいと考えている。

- ・ 地域の郷土史家に出会える仕掛けを作る。
- ・ 発想を収斂させるというテーマを学際的に扱って、相互補完的に進める。
- ・ 定説があって自由な発想が許されない、という先入観が背景にありそうだ。明確に理解させた上で地域素材と学生との出会いを演出するなど、効果的な刺激の与え方に腐心するとよいのではないか。

3-3 提言

2014年7月5日に開催された第13回日本国際文化学会において、自由論題として「そう言えばメソッド」を紹介したところ、参加者からは次のような感想が寄せられた。

- ・ 諸外国では、地域の博物館に学生たちが出かけていくことは、ごく日常的な光景である。そうしたオーソドックスな手法が、日本では見られないことは、かねてより最大の課題であると感じていた。そもそも、地域の子ども（学生）たちは、宝物があること自体を知らないのではないだろうか。この取り組みは、学生たちを知の資源とつなぐきっかけとできるかも知れない。（関東圏大学教授）

- ・ ラショナルなもののみを追い求めてきた教育体制の中で、こ

れまで子どもたちが振り捨ててきた地域史学習の位置づけを問う貴重な問題提起だったと思う。(中京圏大学教授)

- ・ 実にシンプルでわかりやすい手法だが、まさに目からウロコ的印象だった。この取組は、「条件が制約されればそれだけ高い創造性が発揮される」という事例の典型のように感じた。

(関東圏大学研究員)

- ・ 2015年9月に、京都で予定している第1回文化交流創成コーディネーター資格認定講座のテーマは「京都の町の歴史を個人化する」という内容である。ともすれば教科書的、中央史的な視点で捉えられがちな京都の歴史を「地域史の特異性」の観点から主体的に編集し、再認識しようというもので、今回紹介された「地域学習プリント作成」の手法は格好の試みである。(関東圏大学教授)

これらのインターローカル人材育成の中核に位置する人々からの感想は、「そう言えばメソッド」が博学連携の閉塞感に解決の糸口を与える妥当解の1つであることへの励ましと自負している。

なお、筆者は先頃、実際に古文書を見てみたいと希望する大学生5名を山口県文書館に紹介し、古文書の閲覧を支援するワークショップを実施した(図U、V)。なお、その際に回収したアンケートによると、活字になったものと古文書とでは印象が違くと「思う」とした大学生は5人中4人で、「まあ思う」が1名であった。このことは、〈知の資源〉への直接のアプローチが、一次史料の持つ情報量の豊かさを実感させる恰好の機会を提供していることを裏付けている。また、今後やってみたいと感じた調査は、「現地の写真撮影」が2名、「文献調査」が2名、博物館の見学が1名であった。このことは、〈知の資源〉へのアプローチ体験が、さらなる次の自発的な行動を強く動機づけていることを示している。なお、自由記述欄には次のような感想が見られた。

- ・ 古文書の字は達筆で読み取ることが困難だったけれど面白かったです。直筆の字から人柄を感じ取れたり、その人のイメージが変わったりしました。また、内容だけでなく(手紙の)折り方や封のしかたなどにも興味を持ちました。(1年生女子)
- ・ 他に興味のある分野が出てきたときには、文書館をまた利用してみたいです。(2年生女子)
- ・ インターネットや書籍で見たものとはイメージが異なり、資料から多くの考察ができたと思います。(1年生女子)
- ・ 実際に古文書を見て、その人物や建造物、土地の印象がかなり変わった。(1年生男子)
- ・ (美術館ではガラス越しだったが)古文書の閲覧では、手に取って実際に自分たちでめぐりながら書いてあることを読み

取っていくことができたのでとても良かった。また活字ではなく、自筆のものを見ることで資料としてどんな物だったのかということを感じ取れた。(1年生女子)

これらの感想は、一次資料へのアプローチが3-1-2③で述べた学生の学びの質を変容させる可能性を裏付けている。このように、「そう言えばメソッド」を強調し、発展させる事により、本稿1-2で指摘した博学連携の有機的な善循環の端緒を模索することができると考えている。



活字情報だけではわからない折り方なども興味深い



古文書に触れる緊張感も貴重な学習体験となった

- *1) 山口県総合企画部スポーツ・文化局県史編さん室
- *2) たとえば、「亥六月廿七日」の文字の示す迅速性からは当時の為政者が抱いた国家存亡の危機感を、「高杉晋作」の文字からは吉田松陰門下生が目指した主体的開国の概念を、「奇兵隊」の文字からは経済を破壊された民衆が希求した生活安定などを伝えることが可能であろう。
- *3) 筆者が2012年3月に近隣5県の高等学校地歴科教員を対象に実施したアンケートによると、高等学校の日本史学習に地域素材を導入することは効果的だと「思う」とした教員は68.8%あり、「まあ思う」を加えると90.7%を占めるのに対して、地域素材を用いた日本史授業を「実践した」と回答した教員は53.1%にとどまっており、ほぼ半数の学校が地域史学習を実践できていないことがわかった(N=32)。
- *4) 一場郁夫「歴史学習における博物館の効果的な活用法」;in「千葉県博物館協会『museum ちば35』(2004)pp.40-47
- *5) 拙稿「高等学校における地域素材を活用した新しい日本史授業モデルに関する研究」(山口県立大学国際文化学研究所修士号取得論文(2013))
- *6) John H. Falk, Lynn D. Dierking (高橋順一訳)『博物館体験—学芸員のための視点—』(1996)雄山閣出版
- *7) 立木貴文「地域と結ぶ歴史教育を目指して—そのいくつかの試み—」(1996)p.5
- *8) 白井克尚「中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察—愛知県横須賀中学校『郷土クラブ』の実践の分析を通して—」;in「愛知教育大学歴史学会『歴史研究57』(2011)pp.17-39
- *9) 坪井龍太「新学習指導要領に対応した中学生のための博学連携へのアプローチ—郷土への理解を深める試み—」;in「東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』第30号」(2012)pp.27-58
- *10) 今田晃一他「教育メディアとしての博物館の可能性」(2005)pp.47-55
- *11) 江口正洋「博学連携による学校の枠組みを超えた『学び』の広がりについて—第6学年『総合的な学習：縄文火焰街道プロジェクト』の取組から」;in「上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究 Vol.15』(2005)pp.211-216
- *12) 「琵琶湖博物館と連携した体験学習プログラムの開発と評価—小学校社会科『くらしのうつりかわり』を題材に—」;in「滋賀大学教育学部紀要『教育科学 No.57』(2007)pp.177-190 / 藤岡達也『環境教育と地域観光資源』(2008)pp.62-78
- *13) 前掲, 拙稿(2013)pp.101-110 に筆者が2012年4月～5月にかけて実践した記録を紹介している
- *14) 前掲, 拙稿(2013)p.213
- *15) 前掲, 拙稿(2013)p.214
- *16) 前掲, 拙稿(2013)p.215
- *17) 2002, 林徳治(立命館大学教授)による
- *18) 拙稿「プリントを用いた地域史学習の可能性について—定期考査問題を利用した場合—」;in「山口県立大学学術情報第7号〔国際文化学部紀要通巻第20号〕(2014)において、「問題文が会話形式だったのは、頭に入りやすくて良かったです」(p.34), 「先生と生徒の会話を熱中して読んでいた」(p.35), 「会話調だったので楽しみながら読むことができた」(p.35)などの高校生の声を紹介している。
- *19) 鈴木隆泰は、本質に目を向けることのない表層的な模倣の危険性について、「薬王品」の制作者たちがstūpa(仏舎利塔)とcaitya(仏舎利なしの塔)とを混同していた事例を通して、似通っているながら本質的違いがある2つのものを同次元に扱うこと(not know the difference or the rigid distinction between stūpa and caitya)によって本質まで見失われたことを述べ、これは現代にも潜む陥穽であると指摘している。「『法華経』におけるstupaとcaityaの区別を知らなかった『薬王品』の制作者たち」;in「日本印度学仏教学会『印度学佛教学研究62(3)』(2014)pp.1185-1193